第３講 演習問題（古文）

第３問 次の文章は『平家物語』巻第七「忠度都落(ただのりのみやこおち)」の全文である。これを読んで、後の問い（**問１～５**）に答えよ。

薩摩守忠度(さつまのかみただのり)(注1)は、いづくよりや帰られたりけん、侍五騎、童(わらは)一人、わが身共に七騎取(とつ)て返し、五条の三位俊成卿(さんみしゆんぜいきやう)(注2)の宿所におはして見給へば、門戸を閉ぢて開かず。「忠度」と名のり給へば、「落人(おちうと)帰りきたり」とて、その内騒ぎあへり。薩摩守馬(むま)よりおり、みづからたからかにのたまひけるは、「別(べち)の子細候はず。三位殿に申すべきことあつて、忠度が帰りまいつて候ふ。門をひらかれずとも、此(この)きはまで立ちよらせ給へ」とのたまへば、俊成卿、「(A)さる事あるらん。その人ならば苦しかるまじ。入れ申せ」とて、門を開けて対面あり。事の体、何となうあはれなり。

薩摩守のたまひけるは、「年ごろ申し承つて後、おろかならぬ御事に思ひ参らせ候へども、この二、三年は、京都の騒ぎ、国々の乱れ、しかしながら当家の身の上の事

メモ欄

に候ふ間、(ア)粗略を存ぜずといへども、常に参り寄る事も候はず。君(注3)すでに都を出で(い)させ給ひぬ。一門の運命はや尽き候ひぬ。撰集(せんじふ)のあるべきよし承り候ひしかば、生涯の面目に、一首なりとも御恩をかうぶらうど存じて候ひしに、やがて世の乱れ出で来て、その沙汰なく候ふ条、ただ一身の嘆きと存じ候ふ。世静まり候ひなば、勅撰の御沙汰候はんずらん。これに候ふ巻物のうちに、Bさりぬべきもの候はば、一首なりとも御恩をかうぶりて、草の陰にてもうれしと存じ候はば、遠き御守りでこそ候はんずれ」とて、日ごろ読みおかれたる歌どもの中に、秀歌とおぼしきを百余首書き集められたる巻物を、今はとてうつ立たれけるとき、これを取つて持たれたりしが、鎧(よろひ)の引き合はせより取り出でて、俊成卿に奉る。

三位これを開けて見て、「かかる忘れ形見を給はり置き候ひぬる上は、ゆめゆめ粗略を存ずまじう候ふ。御疑ひあるべからず。さてもただ今の御渡りこそ、情けもすぐれて深う、あはれもことに思ひ知られて、感涙おさへがたう候へ」とのたまへば、薩摩守喜びて、「今は西海の波の底に沈まば沈め、山野にかばねをさらさばさらせ。浮

メモ欄

世に思ひ置く事候はず。さらばいとま申して」とて、馬にうち乗り甲(かぶと)の緒を締め、西をさいてぞ歩ませ給ふ。三位後ろをはるかに見送つて立たれたれば、忠度の声とおぼしくて、「前途(注4)程遠し、思ひを雁山(がんさん)の夕べの雲に馳(は)す」と、高らかに口ずさみ給へば、俊成卿いとど名残惜しうおぼえて、涙をおさへてぞ入り給ふ。

その後、世静まつて、千載集を撰ぜられけるに、忠度のありしありさま、言ひ置きし言の葉、今さら思ひ出でてあはれなりければ、かの巻物のうちに、さりぬべき歌、いくらもありけれども、(イ)勅勘の人なれば、名字をばあらはされず、故郷花(注5)(こきやうのはな)といふ題にてよまれたりける歌一首ぞ、読み人しらずと入れられける。

C さざなみや志賀の都は荒れにしを昔ながらの山桜かな

その身、朝敵となりにしうへは、(ウ)子細に及ばずといひながら、うらめしかりしことどもなり。

（注）１　薩摩守忠度 ―― 平家の武将。歌人としても有名。
２　五条の三位俊成 ―― 藤原俊成。『千載和歌集』撰者。
３　君 ―― 安徳天皇。平家一門と共に都落ちする。

メモ欄

4　前途程遠し、思ひを雁山の夕べの雲に馳す――『和漢朗詠集』にある送別の句。
5　故郷花――長等(ながら)山に咲いている山桜のこと。

メモ欄

問１　傍線部Ａ「さる事あるらん。その人ならば苦しかるまじ」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は［１］。

① 我々が都落ちすることはあるだろう。忠度ならばかまわない。
② 忠度が訪ねてくることはあるだろう。彼ならば差し支えあるまい。
③ 勅撰集に選ばれることはあるだろう。忠度ならばおかしくはない。
④ 勅撰の沙汰はあるだろう。忠度ならば撰者にしてやってもいい。
⑤ 落人をかくまうことはあるだろう。忠度ならば遠慮はいらない。

問２　傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は [2] ～ [4]。

(ア)　粗略を存ぜず　[2]

① おろそかに思ってはいない。
② いくさの計略については知らない。
③ 粗末な身なりであるにもかかわらず。
④ 無礼かどうかも判断できない。
⑤ ろくなあいさつさえしていない。

(イ)　勅勘　[3]

① 帝の意志。
② 帝の勘違い。
③ 帝のとがめ。
④ 帝の褒美。
⑤ 帝の通知。

(ウ)　子細に及ばず　[4]

① 細かいことは分からない。
② ささいな違いは気にしない。
③ 今のところ勝ち目はない。
④ 生きて帰れるとは限らない。
⑤ とやかく言えるものではない。

問３　傍線部B「さりぬべきもの」とあるが、その意味として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 5 。

① よく手直しすればましになりそうなもの。
② ある程度まではよくできているもの。
③ 傑作と判断して間違いないもの。
④ 勅撰集に載せるにふさわしいもの。
⑤ いかにも初心者の作品らしいもの。

問４　傍線部Ｃ「さざなみや志賀の都は荒れにしを昔ながらの山桜かな」の歌の説明として**適当でないもの**を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は［６］。

① 掛詞（かけことば）が用いられている。
② 枕詞（まくらことば）が用いられている。
③ 文末の「かな」は詠嘆の終助詞である。
④ 忠度が俊成に求められて作った歌ではない。
⑤ 戦乱で荒れ果てた都を詠（よ）んだ歌である。

問５ 次に掲げるのは、本文中の和歌に関して、生徒と教師が交わした授業中の会話である。歌の解釈や、この歌が「読み人しらず」として勅撰集に掲載された理由として、会話の後に六人の生徒から出された発言①〜⑥のうち、適当なものを**二つ**選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は［7］・［8］。

生徒 最後、忠度の歌が「読み人しらず」として勅撰集に掲載されたとありますね。

教師 これは実際に確かめられるよ。『千載和歌集』の春歌の部に「故郷花といへる心をよみ侍りける 読み人しらず」として、まったく同じ歌が載っているんだ。

生徒 『平家物語』を読めば作者が忠度であることはすぐに分かるのに、わざわざ隠すんですね。

教師 作者がはっきりしているのに、あえて「読み人しらず」とすることは珍しくないよ。たとえば『新古今和歌集』に「おのが妻恋ひつつ鳴くや五月闇（さつきやみ）神南備山（かんなびやま）の山郭公（やまほととぎす）」という「読み人しらず」の歌があるが、これの作者は後鳥羽院なんだ。

生徒 後鳥羽院の歌を「読み人しらず」にしたんですか。

教師 ここには本来、山部赤人の「旅にして妻恋すらしほととぎす神奈備山にさ夜ふけて鳴く」という歌が入るはずだった。後で同じ歌が『後撰和歌集』に載っていることが分かって、他の勅撰集と重複させるのは避けたかった。だから後鳥羽院が赤人の歌をもとにこの歌を作って差し替えたんだ。院の名を出さずに「読み人しらず」としたのは、全体の調和を保つためらしいよ。

生徒 『万葉集』にも名前の分からない民衆の歌がたくさん載っているけれど、勅撰集の「読み人しらず」にはいろいろな理由があるんですね。

教師 じゃあ『平家物語』の忠度の歌について、これが「読み人しらず」として扱われた理由も含めて話し合ってごらん。

① 生徒Ａ ―― これは、戦乱で「志賀の都」を捨てることになった辛さを歌った歌だね。落人になったからといって名前も載せてもらえず「読み人しらず」として扱われた無念が最後の「うらめしかりしことどもなり」にこもっているように感じる。

② 生徒Ｂ ――『万葉集』で多くの人が作者不明とされているように、『平家物語』が過去のものになるにつれて、忠度の歌も忘られてしまったんじゃないかな。だから『千載和歌集』にも名前がないんだよ。

③ 生徒Ｃ ―― いや、平家の人々は朝敵になって都から出ていった、いわば罪人でしょう。「読み人しらず」としてでも勅撰集に載せてくれたのは俊成なりの、精一杯の友情のあかしだと思うよ。

④ 生徒Ｄ ―― さっきの先生の話で、全体の調和を考えて後鳥羽院の歌を「読み人しらず」にしたとあったように、上手な歌じゃないから「読み人しらず」にしたんじゃないかな。「志賀の都」なんて源平の合戦とぜんぜん関係ないし。

⑤ 生徒Ｅ ―― それまで仲良くしてくれたのに、都落ちが決まったとたんに門も開けてくれなくなった人々の心変わりを感じて、「桜だけは昔と変わらず迎えてくれる」と慰めを見いだしているんだ。人の心は変わっても自然は昔と変わらないから。

⑥ 生徒Ｆ ―― 源平の合戦とは関係なく、古都に咲く桜の姿を歌っているね。春の情景として純粋に美しいから、春歌として掲載されたんだと思う。

■ 演習問題

問題番号	設　問	解答番号	正　解
第３問	1	1	2
	2	2	1
		3	3
		4	5
	3	5	4
	4	6	5
	5	7 － 8	3 － 6

（注）
－（ハイフン）でつながれた正解は，順序を問わない。

■現代語訳

薩摩守忠度は、どこから帰られたのであろうか、侍五騎、童一人、自分自身とあわせて七騎で（都に）引き返し、五条の三位俊成卿〔＝藤原俊成〕の屋敷にいらっしゃってご覧になると、門は閉じていて開かない。「忠度」と名乗りなさると、「落人が帰って来た」と言って、その内側では騒ぎ合っている。薩摩守は馬から降りて、自ら高らかにおっしゃるには、「特別なわけはございません。三位殿〔＝俊成〕に申し上げることがあって、忠度が帰ってまいりました。門を開かれなくとも、この近くまで立ち寄りなさいませ」とおっしゃると、俊成卿は、「そうするわけもあるのだろう〔＝忠度が訪ねてくることはあるだろう〕。その人〔＝彼〕ならば差し支えあるまい。入れ申し上げよ」と言って、門を開けて対面した。その様子は、すべてにわたってしみじみとした感じである。

薩摩守がおっしゃるには、「長年（和歌を）教えていただいて以来、（和歌のことは）おろそかに思い申し上げることはありませんが、この二、三年は、京都での騒ぎや、国々の乱れがあり、すべて当家〔＝平家〕の身の上のことですので、（和歌を）おろそかに思ってはいないのですが、いつも（あなたのところに）参上することもございません。君〔＝安徳天皇〕はすでに都を出発なさった。平家一門の運命は、もはや尽きました。勅撰集の編纂があるだろうことを伺いましたので、生涯の名誉に、一首だけでもご恩を被って入れていただこうと思っておりましたが、すぐに乱れが起こって、その〔＝勅撰集の〕ご沙汰もなくなってしまったことは、（私にとって）ただただ大きな嘆きと思っております。世が鎮まりましたならば、勅撰集のご命令がございましょう。ここにございます巻物の中に、（勅撰集に載せるに）ふさわしいものがございましたならば、一首であってもご恩を被って（入れていただいて）、草葉の陰〔＝死後〕でも嬉しいと思いましたら、遠いあの世から（あなたを）お守りしましょう」と言って、これまで詠みおきなさった歌の中で、秀歌と思われるものを百余首書き集められた巻物を、今は（もうこれまで）と出発なさったとき、これを手に取って持っていたが、鎧の合わせ目から取り出して、俊成卿に差し上げる。

三位〔＝俊成〕はこれを開けてみて、「このような忘れ形見をいただきました以上は、決して粗略にはいたしません。お疑いなさいませんように。それにしてもただ今のご来訪は、風情も非常に深く、哀れもしみじみと感ぜられて、感涙を抑えきれません」とおっしゃると、薩摩守は喜んで、「今は西国の海の波の底に沈むのなら沈んでもよい、山野に屍を晒すなら晒してもよい。この世に思いを残すことはございません。

それでは、お別れを申し上げまして（参ります）」と言って、馬に乗って兜の緒を締めて、西を目指して（馬を）歩ませなさる。三位〔＝俊成〕は（忠度の）後姿をはるかに見送って立たれていると、忠度と思われる声がして、「前途程遠し、思ひを雁山の夕べの雲に馳す〔＝これからの旅路は遠い、雁山の夕方の雲に思いを馳せる」と、高らかに口ずさまれたので、俊成卿はますます名残惜しく思われて、涙を抑えながら（屋敷の中に）入りなさる。

その後、世が鎮まって、（俊成卿が）『千載集』を編纂されたときに、忠度の生前の様子や、言い残した言葉が、今さらになって思い出されてしみじみと感じたので、あの巻物の中に、ふさわしい歌は、いくらもあったけれども、帝のとがめを受けた人であるので、名字を明らかにされず、「故郷の花」という題で詠まれた歌一首を、「読み人しらず」として入れられた。

さざなみや……＝志賀の都は荒れてしまったが、昔のままの長等山の山桜よ

その身〔＝忠度〕が、朝敵となってしまった以上は、とやかく言えるものではないと言うけれど、残念だったことである。